東京学芸大学　先端教育人材育成推進機構　外国人児童生徒教育ユニット

外国人児童生徒等教育研修　2023
報　告

概要

参加者数（申込） 80 名

研修趣旨

主に小学校での指導・支援に焦点をあてて、文化間移動する子どもとその背景の理解、日本語教室（国際教室）の運営の仕方、指導内容の構成や実施方法を理解することを目的とした。初任者でも、自信をもって、子どもの実態に応じた日本語指導や教科学習支援に取り組めるように、基本的事項と併せて、具体的な実践事例等も紹介した。

研修の成果

講義1では、日本社会における多文化化の進行状況、および文化間移動する子どもの背景や・抱える課題を理解した上で、異文化適応、アイデンティティ形成、第二言語習得等について、基本的な理論、考え方について、理解を深めることができた。

講義2では、日本語教室（国際教室）の運営の仕方、担当教員の役割について、具体的な事例をもとに理解することができた。

講義3では、日本語指導の内容・方法と、子どもの実態に応じた構成の仕方、教科につながる日本語指導の実施方法について、事例をもとに理解することができた。

研修実施日　2023年6月18日　10:00～12:00
オンライン　第１回

プログラム

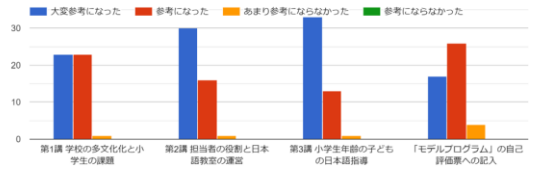
小学生年齢の子どもの多様性を捉え・育み・つなぐ

講義１　日本社会の多文化化と小学生の課題
見世千賀子・米本和弘（東京学芸大学）

講義２　担当者の役割と日本語教室の運営
谷啓子（東京学芸大学）・横溝亮（横浜市教育委員会）

講義３　小学生の日本語指導
齋藤ひろみ（東京学芸大学）・今澤悌（甲府市立大国小学校）

アンケート結果（満足度）



表：参加者のプログラム別満足度

資料の利用ついて

ご利用は教育・研修の場に限らせていただきます。利用に当たっては、本研修名・作成者名を明示し、抜粋・加工等をせずに、ご利用ください。

参加者からの声（アンケートより）

具体例を提示していただきながら学ぶことができたので、日本語学習の意味や指導の方向性への理解が深まりました。研修を受ける前は、日本語をいち早く覚えることで、教科学習に参加しやすくなると考えていましたが、指導者がその心持ちでいると、子供に相当な負担をかけてしまうと感じました。今後は、教科学習の内容とリンクさせながら、明日も学びたい！日本語を知ることが楽しい！と子供自身が感じられるようにしていきたいです。

日本語教員だけでなく担任との連携が重要であることや、日本語教室が子どもたちにとっての居場所になる必要があるなど、あまり自分の中で重要視できてなかったと思ったので、とても参考になりました。また、事例がたくさんあり、自分の明日からの授業で実践していきたいと思いました。

テキストに沿った指導ばかり考えていましたが、教科と関連付けた文型の指導、語彙指導、学習したことのアウトプットなど、明日の指導から取り入れていきたいと思いました。

東京学芸大学　先端教育人材育成推進機構　外国人児童生徒教育ユニット

外国人児童生徒等教育研修　2023
報　告

概要

参加者数（申込） 80 名

研修趣旨

文化間移動による異文化適応やアイデンティティの揺らぎ・変容、そして、認知的発達への影響を理解した上で、具体的な事例をもとにして、日本語や教科の指導・支援をどのように行うのか、また、外国人児童生徒等に対する教育に学校全体でどのように取り組むのかについて学び、考えることを目的とした。

研修の成果

講義では、発達段階やアイデンティティを考慮した指導・支援の重要性や、それを支えるための学校内での組織的な取り組みの必要性について理解を深めることができたようであった。

報告1では、道徳や総合での取り組みをもとに、子どもたちの情意的側面に焦点を当てた指導と、多様な背景を持つ子どもたちが受け入れられる土壌づくりの大切さを学ぶことができた。

報告2では、日本語学習における理解や表現、記憶のための支援の具体的な方法や工夫と、子どもたちの反応も伺うことで、情意的側面にも配慮した指導について理解を深めることができた。

研修実施日　2023年9月10日　10:00～12:00
オンライン第2回

プログラム

中学生年齢の子どもの多様性を 捉え・育み・つなぐ

講義　文化間移動する中学生の心とことばの学び

齋藤ひろみ・見世千賀子（東京学芸大学）

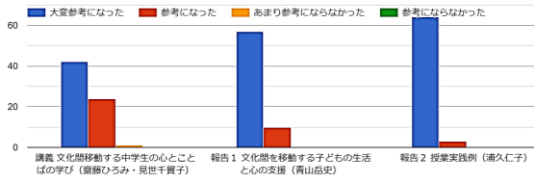
中学校現場からの報告

1　文化間を移動する子どもの生活と心の支援

青山岳史（可児市立蘇南中学校）

2　授業実践例　　浦久仁子（堺市立三原台中学校）

アンケート結果（満足度）



図：参加者のプログラム別満足度

資料の利用ついて

ご利用は教育・研修の場に限らせていただきます。利用に当たっては、本研修名・作成者名を明示し、抜粋・加工等をせずに、ご利用ください。

参加者からの声（アンケートより）

本人の発達段階や移動による言語習得や教科学習の内容習得の程度、年齢や心理的要因による文化受容の差、アイデンティティの揺らぎなどに加え、養育する家族の社会における位置などによりさらに多様化するという全容がよくわかりました。そのような中で共通の課題について個別の支援なども実施しながら、学習に取り組んでいる中学生の姿が印象に残りました。在籍学級の生徒の理解や変容にも取り組まれている実践などもうかがうことができ、今後の参考にさせていただきたいと思いました。

生徒の心に寄り添い、周囲の環境を整える支援もしながら子どもの生きる力を育てているところがすばらしいと思いました。楽しく自主的に学習するための封筒ゲームや文作りカード、にほんごえほんや早口計算など、さまざまな教材の工夫もすばらしかったです。ぜひ、参考にして日本語指導に取り入れたいと思います。ありがとうございました。

外国につながる子どもたちを在籍学級とつなぐことや、彼らの道徳、総合的な学習の時間での学びの充実について悩んでいたので、実践を聞くことができ、とても勉強になりました。もっとお話を聞きたいとも思いました。

また、実践発表や講義から、アウトプットの場をもつことをもっと大切にしたいと改めて思いました。

東京学芸大学　先端教育人材育成推進機構　外国人児童生徒教育ユニット

外国人児童生徒等教育研修　2023
報　告

概要

参加者数（申込） 100 名

研修趣旨

　最終回となるオンライン第 3 回は、就学前段階の多様な言語文化背景を持つ幼児やその家族を対象とした支援を学ぶことを目的とした。

研修の成果

　前半の講義では、文化間移動する親子のライフコース、接続期、幼児期のことばの発達とその背景となる理論について学び、後半は支援例として大垣市のプレスクール「きらきら教室」の実施概要と活動の実際、互いに学び合う参加型の地域活動「地球っ子クラブ 2000」2つの生き生きとした実践報告をいただいた。いずれの実践も子どもだけでなく保護者も参加し、学び、その経験を活かしてコミュニティメンバーとして活躍する場となっており、家庭支援の大切さが伝わった。
　アンケート結果より、就学前支援の体制作りはこれから、という参加者が多く、今後の活動のヒントになった、という声があった。構成として講義での理論と、実践報告での支援例が学びとして結びついたことがうかがえる。

研修実施日　2023年12月23日　10:00～12:00
オンライン第3回

プログラム

就学前の子どもの支援・教育

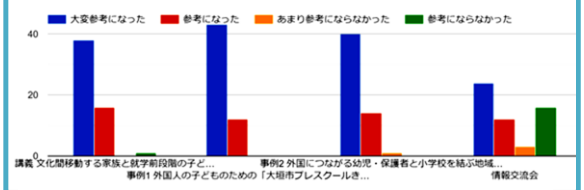
講義　文化間移動する家族と就学前段階の子どもの教育課題
齋藤ひろみ（東京学芸大学）

取り組み事例報告

1　外国人の子どものための
「大垣市プレスクールきらきら教室」の取り組み
坪井牧子（大垣国際交流協会講師）

2　外国につながる幼児・保護者と小学校を結ぶ地域活動
髙柳なな枝(地球っ子クラブ 2000 代表）

アンケート結果（満足度）



図：参加者のプログラム別満足度

資料の利用ついて
ご利用は教育・研修の場に限らせていただきます。利用に当たっては、本研修名・作成者名を明示し、抜粋・加工等をせずに、ご利用ください。

参加者からの声（アンケートより）

外国人児童生徒への支援は多くの地域で実施されているものの、就学前の子どもと親御さんへの支援は少ない。活動報告の事例や、講義など、より具体的な支援の形を知ることができた。

就学前からと学校に入ってからの違いや子供、保護者の戸惑いについてわかり、就学前からのサポートがあることが大事だとわかった。子供も日常の中で観察や発見をしており、言葉を学ぶ前から言葉のもつ機能を知り、真似をして学んでいくこと。養育者の語りかけが、子供の認知発達を促すこと。読み聞かせでは、話し言葉とは異なる表現に出会い、語彙を増やしたり、想像力を深めたりすることにつながること。事例報告では、具体的な活動の例をたくさん紹介してくださり面白いと思った。日頃からつながり、何かあったときに気軽に聞きやすい関係づくりをしておくこと、子供にも保護者にも適切な働きかけを絶やさないことが大事だと学んだ。

東京学芸大学　先端教育人材育成推進機構　外国人児童生徒教育ユニット

外国人児童生徒等教育研修　2023
報　告

概要

研修実施日　2023年7月30日　13:00～16:00　対面第１回

参加者数（申込） 37 名

研修趣旨

日本語のコースを組み立てる複数プログラムの中から「日本語基礎プログラム」を取り上げ、文型の授業展開例や具体的な指導方法、発達の違いによる授業設計などを学ぶことを目的とした。具体的な教材をもとにその作成意図や使用法について学ぶ機会を提供し、さらに、ワークショップでは具体的な事例の紹介とともに参加者自身が活動を作成する機会を得ることを目的とした。

研修の成果

講義1では、日本語プログラムの全体像や、「日本語基礎プログラム」の具体的な授業展開例や指導法、また、日本語の特徴を理解することを通して、日本語指導の要点を理解することができたようであった。講義2では、発達の違いによる授業設計の具体や、具体的な教材について指導法を知ることにより、受講者は多くの気づきを得ていたようであった。

事例紹介では、工夫に富んだ事例を知ることで、参加者自身の実践に参考になるという意見が見られた。ワークショップでは、多様な参加者によるグループワークで活発な意見交換が行われ、各グループの成果報告からも学びを得ることができたようである。

プログラム

子どものための日本語教育 1― 日本語の基礎を教える

講義１　小中学校における日本語プログラム（日本語プログラムと日本語の特徴）　齋藤ひろみ・小西円（東京学芸大学）

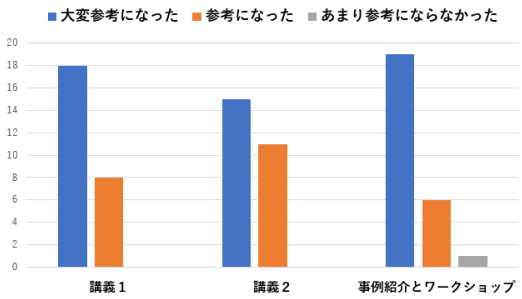
講義２　社会生活を重視した日本語指導　志村ゆかり（一橋大学）

事例紹介とワークショップ　「日本語基礎–語彙・文型–」の授業づくり

分科会１　濱村久美（江戸川区立清新ふたば小学校）・見世千賀子（東京学芸大学）

分科会２　柏木めぐみ（新宿区立大久保小学校）・米本和弘（東京学芸大学）

分科会３　田中阿貴（北区立赤羽岩淵中学校）・市瀬智紀（宮城教育大学）・谷啓子（東京学芸大学）



図：参加者の満足度

資料の利用ついて

ご利用は教育・研修の場に限らせていただきます。利用に当たっては、本研修名・作成者名を明示し、抜粋・加工等をせずに、ご利用ください。

参加者からの声（アンケートより）

成人と児童生徒とは言語指導目的は違うと感じていたが、その違いを意識した指導方法がわからなかった。今回の研修でヒントをいただけた。頭だけで理解できていたものが手や口が動かせる状態になった、という気持ち。

ワークショップ（分科会）では、グループに別れて色々なアイディアを出し合って、発表のときにこういうアイディアも良いですねといった感じで、教師の皆さん、参加者皆さんと交流出来たのはとても良かったと思います。

東京学芸大学　先端教育人材育成推進機構　外国人児童生徒教育ユニット

外国人児童生徒等教育研修　2023
報　告

概要

研修実施日　2023年8月8日　13:00～16:00　対面第2回

参加者数（申込） 39 名

研修趣旨

複数の言語を使用する子どもたちのことばの力を対話型で引き出しながら、観点を明確にして捉えること（「外国人児童生徒のため JSL 対話型アセスメント DLA」を利用して）、そして、興味・関心を大事にし、探究する力を高めるための、内容と日本語の統合学習（「JSL カリキュラム」トピック型」）の活動の組み立て方を学ぶことを目的とした。

研修の成果

講義１では、体験活動を通し、子どもたちの言語能力把握の考え方や観点を、支援・指導している子どものパフォーマンスに結び合わせて理解を進めることができたようであった。

講義２・事例紹介を受けてワークショップでは、参加者それぞれの発想と子どもに身に着けてほしい力を、グループ内で検討し、「トピックを巡る言語活動」としてデザインした。最後に、各グループで検討した活動プランについて共有したが、意図を活動計画として設計することの難しさと可能性について交流することができた。

プログラム

子どものための日本語教育 2― 内容と日本語の統合学習①

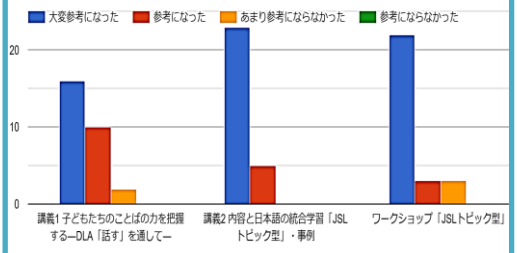
講義１　子どもたちのことばの力を把握する― DLA「話す」を通して―
米本和弘（東京学芸大学）

講義２　内容と日本語の統合学習「JSL カリキュラム・トピック型」について
齋藤ひろみ（東京学芸大学）

事例紹介　市川昭彦（文部科学省外国人児童生徒等教育アドバイザー）
横溝亮（横浜市教育委員会）

ワークショップ「 JSL カリキュラム・トピック型」の授業づくり
分科会 1 市川昭彦、米本和弘・見世千賀子（東京学芸大学）担当
分科会 2 横溝亮、谷啓子・齋藤ひろみ（東京学芸大学）担当

アンケート結果（満足度）



図：参加者の満足度

資料の利用ついて

ご利用は教育・研修の場に限らせていただきます。利用に当たっては、本研修名・作成者名を明示し、抜粋・加工等をせずに、ご利用ください。

参加者からの声（アンケートより）

ご講義の間に、講師の先生方の実践授業があることで、トピック型授業、子どもたちの探究活動の具体的なイメージをもつことができました。
ワークショップではさまざまなアプローチやアイディアを楽しみながら出し合い、どの意見を採用するかつなげるか、私達自身の探究する力を求められていると感じました。

初めてトピック型を知り、学びました。講義を聞いて分かったつもりでしたが、自分でやってみるとなかなか難しく、グループワークで自分の意見を出すことがやっとできました。目の前の児童の実態をよく把握して、実践できるようにしたいと思いました。

東京学芸大学　先端教育人材育成推進機構　外国人児童生徒教育ユニット

外国人児童生徒等教育研修　2023
報　告

概要

研修実施日　2023年8月9日　13:00～16:00　対面第 3 回

参加者数（申込） 39 名

研修趣旨

内容と日本語の統合学習の考え方で「JSL カリキュラム」の授業づくりをする 2 回目の研修である。1 回目がトピックであったが、今回は教科内容を取り上げる。「JSL カリキュラム」の授業事例からイメージを創り、小グループ（小・中の校種別、教科別）による指導計画の作成を通じて、自身の現場の実践として設計する力を高めることを目指した。

研修の成果

前半の実践事例からは、子どもの捉え方、活動とことばの結び付け方、思考活動と言語化活動との組み合わせ（授業展開）、教材・教具の開発と使い方の工夫等、様々な角度からそれぞれに気づきがあったようである。

後半の指導案作成では、グループの活動を通して、子ども観、言語能力観、学習観の違いに揺さぶられ、話し合いで得られるアイディアに面白がり、指導案にまとめる難しさに沈黙する姿があった。正に、私たち自身が学んでいるという実感のある研修だった。この経験が、子どもを細やかに捉え、学びの場を創造する力になるに違いない。

プログラム

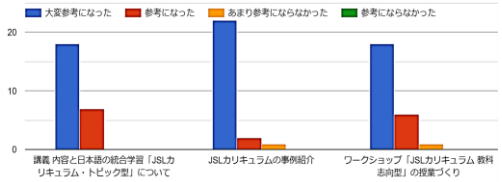
子どものための日本語教育 3— 内容と日本語の統合学習②

講義　内容と日本語の統合学習「JSL カリキュラム・トピック型」について
齋藤ひろみ（東京学芸大学）

「JSL カリキュラム」の事例紹介
小学校分科会　千葉多恵子（羽村市立松林小学校）
衛藤景太（板橋区立第八小学校）
中学校分科会　渡邉順子（新宿区立新宿中学校）
中村夏帆（岩倉市立南部中学校）

ワークショップ「JSL カリキュラム 教科志向型」の授業づくり
小学校分科会　千葉多恵子、衛藤景太、
谷啓子・齋藤ひろみ（東京学芸大学）
中学校分科会　渡邉順子、中村夏帆、
米本和弘・見世千賀子・小西円（東京学芸大

アンケート結果（満足度）



図：参加者の満足度

資料の利用ついて

ご利用は教育・研修の場に限らせていただきます。利用に当たっては、本研修名・作成者名を明示し、抜粋・加工等をせずに、ご利用ください。

参加者からの声（アンケートより）

私はあまり教科学習に携わってないので、こういったときの授業の作り方がよく分からないのですが、実際今日（全て 3 回受けて）経験してみて、ただこちら（指導者）が単語を教えて問題を解いて終わりだけではなく、体験・探究・発信を通して生徒に理解してもらう、そのプロセスがいかに大事かということを学ばせていただきました。今後教科学習（JSL カリキュラム）をする際にはワークショップで学んだことを生かしていけたらと思います。

日本語の目標を立てること　探究する力(考える力)をつけることを念頭に置いて指導することを学習したこと。